



猫城記／(1933)

老 舍(稲葉昭二訳)

サンリオ

(文庫・9/5刊・¥360)

奇妙な小説である。

物語は、主人公が火星に不時着し、猫に似た人々の住む猫国を訪れる——それだけの話。しかし、それだけの中に込められた、著者の情感には、相当な迫力があつた。本書は、本来、風刺小説であり、その当時の中国(昭和八年ごろ)を、デフォルメして描いたものだ。だが、スウィフトの『ガリバー旅行記』のように、「風刺」という第一の目標が、時代の流れの中で欠け落ちた作品とは違い、きわめて近い過去が、物語から感じられる。

創造力など、今も残されている、いわゆる風刺文学と比べて、もの足りない部分もある。けれども、中国が(そして、時代が)生んだこの作品には、捨てがたい味がある。

ここにはユーモアがない聡明さがない——著者は、本書を失敗作である、と語る。書いた本人にとって、あまりに現実的であり、救いのない物語だったから、そう感じたのかもしれない。

老舍は、一八九九年、北京に生まれ、抗日運動に参加、一時アメリカの大学で教鞭をとる。やがて帰国、脚本などを書くが、文革の嵐の中で、一九六六年に死んだ。(俊)